

活格言語・能格言語・対格言語¹

はじめに

コーカサス諸語に多くみられるいわゆる能格言語は、能格と絶対格という特殊な格を持つその構造の特異性によって、古くから言語学者の注意を引いてきたが、近年クリモフ (G. A. Klimov) 等の著作によって提唱されている内容的類型学によると、今まで能格言語の一変種と思われていた、主としてアメリカ・インディアンの言語、南米の言語などは、これとは構造的原理を異にするものであることが、漸次明らかになってきた。このことによって、従来ははっきりしなかった能格言語の特徴が明らかになると同時に、それと対比されてきた、主格と対格を基本的な格とする対格言語の特徴も明確になってきた。内容的類型学は未だ未完成ではあるけれども、これまで気づかれなかったり、説明できなかった多くの現象の解明について、既に一定の成果を挙げており、今後言語研究の中で重要な役割を果たすと思われる。ここではクリモフに従って、一応の説明を試みてみたい。なお、内容的類型学の成立にとって特に重要な研究は、ソヴェト期の20-40年代に、主として当時レニングラードにあった、「エヌ・ヤ・マール名称思想と言語研究所」に集まった言語学者達の研究であった。紙幅の関係で詳しく立ち入ることはできないが、このように、内容的類型学の成立には、ロシア・ソヴェトの長い言語研究の歴史があったことを承知しておく必要がある (文献3)。

内容的類型学

内容的類型学の核心は、簡単に言えば、各言語における主語・述語・目的語の表し方のタイプに言語類型化の核があるというものである。これがすべての類型の基本であり、これに基づいて、この類型に属する言語のさまざまな文法現象 (例えば格の体系、名詞の性、動詞が時制を持つかアスペクトを持つかなど) の特徴が決定される。

クリモフは、グリーンバーグやハルトマン等の「類型学」は例えば語順のような一定の構造的特徴を、それが類型学的にどのような意味を持つかを論じることなく、恣意的に取り出して類型化を行っているとしてクリモフは述べ、さまざまな文法現象が、主語・述語・目的語の表し方のタイプに構造的に依存していることを考慮していないところに問題があるとしている (文献4、p. 27 & seq.)。クリモフはこのようにして主語・述語・目的語のタイプから論理的に説明できる現象を「包含事象」(implication)、ある言語類型にしばしば見られるが、構造的に説明できないものを「随伴現象」(frequentalia)と呼んでいる。

クリモフの類型学の研究が単行本の形ででたのは、末尾に載せたように、能格言語に関

¹これは大修館『月刊言語』23巻9号(平成6年9月)、35-42頁所載のものである。

するものから、活格言語に関するものへと移行している。これは従来能格言語の一変種と考えられていたものが、内容的類型学の観点からすれば、能格言語とは異なった言語類型に属することが明らかになったという、事情を反映している。

この新しく見いだされた言語類型が多くの印欧諸語にみられる対格（主格）言語類型と対蹠的なものであり、能格言語はその中間に位置するものであると考えられるから、この新しい言語類型から出発する方が問題を見やすくすると思われる。能格言語に何か一種の曖昧さがつきまどって離れないのも、この中間的な性格のせいであると思われる。

用語に関して一言すれば、この新しい類型をクリモフは active languages type と呼んでいる。このタイプの言語も、また従来能格言語といわれているものも、必ずしも「格」という形態的なものを持っていなくてもよいことが、機能としての ergative を「能格」と訳するのが定着していることから、私はこれを仮に「活格」および「活格言語」と呼ぶことにしている。

活格言語

活格言語とは、言語外的な世界を生物であるか、それ以外のものであるかに分類する言語である。したがって文法的な性は、生物と無生物に分かれる。無生物は行為主体にはなれないから、無標的な格（絶対格）しか与えられないのに対し、生物性では、行為の積極的な主体となるものには有標的な格（活格）が、また行為の客体、あるいは状態の担い手となるものには、無標的な絶対格が与えられることになる。述語となる動詞も同様に、生物に関わる行為動詞や状態動詞（活格動詞と呼ぶ）と、無生物に関わるもの、あるいは生物でも絶対格としての名詞と結合する状態動詞（絶対動詞と呼ぶ）の二つのカテゴリーに分かれる。また活格言語のもう一つの特徴として、活格動詞には意味的には自動詞も他動詞もあるがこれらは文法的なカテゴリーにはならず、他動詞と自動詞の区別がないことがあげられる。例えば「行く」と「運ぶ」、「走る」と「追う」、「燃える」と「焼く」、「死ぬ」と「殺す」等の語彙的な区別は、原則としてない（文献2、p. 85）。行為の主体としての活格が存在するときには、他動詞的、存在しなければ自動詞的となるわけである。

考えてみれば、これは対格言語のばあいと較べて言語外的現実の把握の仕方が、より直接的であるといえる。例えば「死ぬ」と「殺す」を比較してみれば、両方ともある人または生物の上に「死」というプロセスが生じるという点では同じである。そしてこのプロセスはその人または生物が存在しなければありえない。これに対してこの「死」をもたらした人あるいは生物の存在はこのプロセスにとって二義的でしかない。呪詛が有効であると思われる文化環境では、呪詛を行った人物が「行為者」となるが、そうでないところではこの人物は「行為者」になれないであろう。つまり「行為主体」は認定の問題にすぎない。逆に日本語の「ある」と「いる」のように、同じ行為または状態でも、意味上の主語が生物であるかないかによって、語彙的に異なるばあいもある。

ここで具体例を見てみよう。例えば南米のグアラニ語では、活格と不活格の二系列の指

標をもち、活格系列の接辞は活格動詞の主語を示すが、不活格系列の接辞は活格動詞の意味上の目的語か、絶対動詞の意味上の主語を示すという（文献4、p. 93）。

表1

人称	単数		複数	
	活格	絶対格	活格	絶対格
1	a-	še-	ya-, ro-	yane-, ore-
2	re-	ne-	pe-	pene-
3	o-	i-, ∅	o-	i-, ∅

例えばグアラニ語には表2、表3のような文がある。

表2 活格動詞

	意味的他動詞	意味的自動詞
活格	a-meʔé 「私は与える」	re-wewé 「おまえは飛ぶ」
絶対格	ne-peté 「(彼は) おまえを打つ」	—

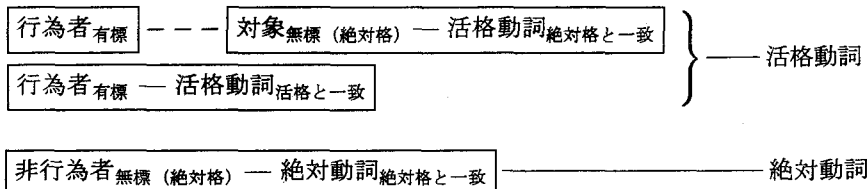
表3 絶対動詞

	意味的他動詞	意味的自動詞
絶対格	—	semiri 「私は控えめだ」

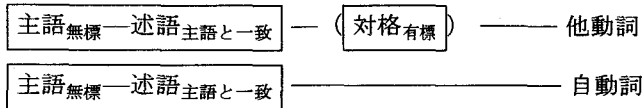
活格言語の包含事象

意味的自動詞の活格動詞と絶対動詞の場合には、その接辞は意味上の主語と文法的に一致している。クリモフによれば、意味上の他動詞による構文の場合、活格の接辞を欠くか、あるいは例外はあるが、活格動詞はまず意味上の目的語と一致してその接辞が動詞の直前におかれ、さらに意味上の主語との一致を行う場合のみ目的語と一致する接辞より前か、動詞の後に来る傾向がある。

これらのことから、この種の言語類型においては、述語は他動詞の意味上の目的語あるいは自動詞の意味上の主語と密接に結びついているということが出来る。すなわち、



これに対して対格言語では対格が有標であり、従って述語は対格を伴うか否かによって自動詞と他動詞を区別するが、一方、述語は主語と緊密な関係を持ち、原則としてこれと文法的に一致する。すなわち、



この類型では対格が有標であるから、これを主格言語というより、対格言語と称した方がよいと思われる。

対格言語では主格は行為者であるかないかに関わりがないから、対格に立つ名詞を主語として受動文を作ることができるが、活格言語（および能格言語）のばあいには、行為者ではない絶対格に立つ名詞を、明らかに行為者を示す活格（能格）に置くことはできない。したがってこれらの言語類型には、能動相・受動相の対立は存在しないことになる。

しかしこのことから、これらの言語類型には相のカテゴリーがないということにはならない。相とは、同じ言語外現実の主述関係を、言語的に二様に表現するものであるとすれば、能動相、受動相に代わるものとして、活格（能格）言語には、アメリカ・インディアンの言語にしばしば見られる「求心相」と「遠心相」（正確には「非求心相」）extrovert-introvert contrast(version)の区別がある。求心相というのは行為が行為主体の内部に留まるものであって、多く有標的である。これに対して非求心相は無標的であるが、多くは行為が主体の外に向かうことを示す。例えば求心相「燃える」、「行く」、「咬まれる」等に対する非求心相は「焼く」、「導く」、「咬む」などであるという（文献2、p. 140）。例えばカマユラ語 kamaiurá では o-juká「彼は（彼を）殺した」に対する o-je-juká「彼は自殺した」、ere-katsi「おまえは（彼を）切った」に対する ere-je-katsi「おまえは自分を切った」のようになるという（文献2、p. 142）。

活格言語には自動・他動の区別がないから、「焼く」も「燃える」も同じ言語外現実の異なった表現に過ぎない。活格言語の特徴の一つに「持つ」に当たる語のないことが挙げられるが、これも「持つ」と「ある」とが語彙的に同じためである。

先に述べたように、活格言語では、例えば「死」のプロセスが実際生じる対象と、「死ぬ」あるいは「殺す」という行為との関係が常に密接であるから、この種の言語では、行為の完了・未完了、あるいは行為の様態等を示す、アスペクトあるいはアクションス・アルトが時制よりも重要になるが、主語との関係が密接である対格言語では、行為の生起する時間が重要となる（文献2、pp. 144–146）。

また活格言語には、活格動詞、絶対動詞のほかに、第三の系列として「情緒動詞」verba affectuum と呼ばれるものがある。これは活格動詞と絶対動詞の間にあるもの、即ち不随意的行為を表す動詞であり、「見える」、「聞こえる」、「知っている」、「したい」、「好きになる」等の語がこれに属する（文献2、p. 96）。

さらに活格言語には「有機的所有」(organic possessive) と「非有機的所有」を表す接辞がみられる。これは後で述べるように、この種の言語には属格がないので、「人の手」ということはできず、「人、(彼の)手」という外はないからである。したがってこれも活格言語の包含事象であるといえる。有機的所有格は (a) 人、動物、植物の身体の一部、(b)

親族関係、(c) 名前、影、足跡、夢、煙管、巢穴のように、人あるいは動物などと切り離せないものに用いられ、原則として動詞の不活性系列の接辞と同じものを用いるという。クリモフはその理由を、この系列の接辞が主体から離れないことを示すためであろうとしている (文献2、pp. 149-150)。

アタパスカン語族のチリカファア語では、有機的所有 bi-tsii 「彼 (自身) の・頭」に対して非有機的所有 bi-'i-tsii 「彼の (所有する)・頭」のようになるという。後者は例えば食用にする頭である。

対格言語の包含事象

これについては既につか述べた。自動・他動、能動・受動のように、普遍的と思われるできたカテゴリーも、実は対格言語の包含現象に過ぎなかったことが次第に明らかになってきた。それだけでなく、例えば属格、与格、具格のような格体系も、対格言語の包含現象にすぎないといわれる。詳しくは述べないが、例えば属格の場合、非修飾語との間に主語あるいは目的語の関係を持つのがその基本であるから、対格言語においてでなければその存在理由がないということになる (文献4、p. 45 & seq., p. 108 & seq.)。

能格言語

能格言語は活格に対応する能格と絶対格からなり、シタグマの関係は、活格言語とほぼ同じで SVO あるいは OVS が最も自然である。述語も活格言語のようにまず絶対格に立つ名詞と文法的に呼応する。しかし名詞は生物・無生物という明確な原理を失い、対格言語に近づきつつあったが、接辞は能格接辞と絶対格接辞の二系列を区別している。

述語動詞の種類は自動・他動の別とされてきたが、これについては従来から疑念が表明されていた。クリモフも「文献1」および「文献2」では、条件つきながら従来の自動詞・他動詞という用語を用いていたが、「文献4」になると前者を *factitive*、後者を *agentive* と呼ぶようになった。これは能格をとる動詞 (*agentive*) でも、意味的には自動詞とすべきものがある一方で、絶対格を意味上の主語とする動詞 (*factitive*) でも、意味的には他動詞と考えられるものがあるからであり、また他方では、活格言語から継承し、したがって能格言語にとっては随件事象にすぎない、自動・他動の区別のない動詞群 (*diffused verb*) が存在しているからである。前者を仮に絶対動詞、後者を能格動詞とする。たとえばコーカサスのアブハジア・アディグ諸語のカバルディン語では、「打つ」、「突く」「つかむ」、「引っ張る」、「触る」、「舐める」、「吸う」、「咬む」のような動詞が絶対動詞に、「沈む」、「走る」、「歩く」等が能格動詞に属するという (文献4、p. 97)。このことから、能格言語が活格言語から対格言語へ発展する、中間の段階にあることが知れる。

このような述語の状態から、かつての活格も内容的に変化しないわけにはいかなかった。結果として活格から発展した能格は、能格動詞にともなわれて行為者および間接目的を表し、絶対格は絶対動詞の意味上の主語および能格動詞の意味上の目的語を表すようになって

た。主語・目的語関係に「融合」(syncretism)が生じたのである。しかしシンタグラマの関係は活格言語の場合と異ならなかったこと、他動・自動の区別が存在しなかったこと、能格が有標的な格であったことによって、能動・受動の別はここでも存在しえなかった。

おわりに

活格言語は能格言語に発展するか、直接対格言語に発展する場合が考えられ、また能格言語はやがて対格言語に発展する可能性がある。活格言語はそれではどんな類型から発展してきたかについては、クリモフはバントゥー諸語に見られるような、多分類言語からであろうとしている。これは『能格言語』や『活格言語』では示唆されているに過ぎないが、『諸原理』ではかなり立ち入った叙述がみられる。今後の課題であろう。

1. クリモフ (G. A. Klimov) 『能格性の一般理論概説』 *Очерк общей теории эргативности*, М., 1973.
2. クリモフ (G. A. Klimov) 『活格言語の類型学』 *Типология языков активного строя*, М., 1977.
3. クリモフ (G. A. Klimov) 『ソ連における類型学研究 (20—40年代)』 *Типологические исследования в СССР (20-40-е годы)*, М., 1981.
4. クリモフ (G. A. Klimov) 『内容的類型学の諸原理』 *Принципы контентивной типологии*, М., 1983.
5. ガムクレリゼ、イヴァーノフ (T. V. Gamkrelidze & V. V. Ivanov) 『印欧語と印欧人』 *Индоевропейский язык и индоевропейцы*, 1-2, Тбилиси, 1984.